

# 母校賛歌

能代高

①

## 旅立ちのころ

「これが、カダ（八郎瀧）の見納めだべか」

揺れ動く荷馬車の上で、畠山哲也（二期、元能代市立檜山中校長）は真剣にそう思った。

あの日から五十年。見納めにはならなかった八郎瀧も、その姿は大きく変わった。半世紀の時の流れ。そういえば、愛する母校も、ことが輝かしい創立五十周年。母校を思う時、五十年前の少年の日の自分の姿が、

題字は能代市教育長

前能代高校長 鎌田 宏氏

畠山はたまらなくなつかしい。

大正十四年四月五日——畠山は、その日、家族と別れる寂しさを必死にこらえた。めそめそするなんて自分らしくない。あしたからは、あこがれの中学生活が隣の能代で始まるのだと思ひながらも……。

畠山の故郷は浜口村（現山本郡八童町）。家の中から海のように広い八郎瀧が見えた。

「カダさ行くであ」

幼いころの畠山は、それが口ぐせ。夏を待ちかねて、水泳や

らシジミ採り……。いつまで遊んでいてもあきない。美しい大自然の中のカダ。まさに“母なる八郎瀧”であった。

入学式の前日、畠山は荷馬車に乗って故郷を離れた。能代まで二時間余の道のり。いまでこそ車で三十分ぐらいの距離だが、交通が不便な当時は、異国への旅立ちの心境だった。

現在と違って、中学（高校）がどこにもある時代ではない。進学を望んでもなかなかかわないし、たとえ実現しても、農村部の少年たちは故郷を離れて暮らさねばならなかった。

畠山の乗った馬車は、八郎瀧の岸に沿ってしばらく進んだ。馬車がやつとスレ違える細い道だ。大曲のところで、現在の7号国道に出た。そこで、視界から八郎瀧が消えた。

いつもは、米俵をいっぱい積

んで能代まで行っている馬車。この日だけは、畠山愛用のバスケット、柳ごうり、ふとんの包みを運んだ。老馬の足取りは軽かった。

「ほら見れ。あんなに雪があるであ」

「んだ。南のほうでは、桜が咲き出したのにな」

同行した村会議員の父親とそんなやりとり。もう四月というのに、道端のところどころに一層近い残雪。かつての能代の冬は、雪が多く、寒さも厳しかった。

能代に着いた晩、東京でいえば帝国ホテル級の大原旅館へ一泊した。ここは、入学試験を受けに来た時にも世話になった。

浜口村の少年で能中を受験したのは五人。合格は畠山と清水正太郎（八童消防団長）の二人だけ。その清水と偶然旅館で同

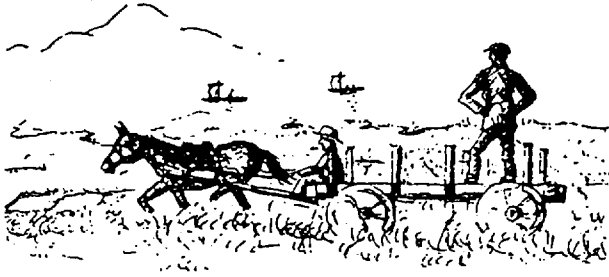
室した。清水の父親も村会議員  
だったし、あるいは親同士の打  
合せでそうなったのか。

清水も、馬の背に揺られて能  
代にやって来た。

いよいよ「旅立ち」という時、  
畠山は祖父からせん別をもらっ  
た。中身を調べたら五円札が一

枚。授業料、寄宿料、小遣い銭  
など全部ひつくるめても二十円  
あれば足りた時代。当時とすれ  
ば大金の「愛のせん別」で、何  
に使ったかはきれいに忘れてし  
まったが、金額が五円だったと  
いうことは、五十年後のいまも  
忘れない。

(敬称略)



さし絵は戸松恭一（新11期・能代高教諭）

## 能代高

②

### 舎生事始め

「きょうから、オレも仲間  
に入れてくれ」

すこぶる人のよさそうな笑顔  
で清水正太郎（第一話に登場）  
が頭を下げた。

畠山哲也（同）が、ちよつび  
り先輩ぶって、こう答えた。

「ん、いいよ。大いにやつべし」

これでやつと舎生が二人。畠  
山は内心、ホツとした。

入学式（大正十四年四月六日）  
を終えた畠山は、ごく当たり前  
のこととして、寄宿舎に入った。  
自宅から馬車で二時間以上かか  
るのだから、自宅通学はでき  
こない。

それにしても、まさか舎生が

一人ぼつちとは考えていなかった。  
能中一期生の名譽ある看板  
はうれしいが、舎生第一号はそ  
んなに名譽、だろろうか。

「早えぐ、舎生が増えないも  
のか」

と願っていた。

そこへ現れたのが清水であ  
る。聞けば、ちよつとしたワケ  
があつて、寄宿生活に切り替え  
ざるを得なかった。

清水は、最初の一カ月間能代  
郊外の長崎というところで、お  
ばの家に下宿した。

ところが、下宿というのも、  
想像以上に不便。第一、農家な  
ので、朝が非常に早い。夜はそ  
の逆だ。夜遅くまで本気になつ  
て勉強しようかなと張り切つて  
いたのに、おばの家の生活ペー  
スとどうもかみあわない。

そんなこんなで、清水は下宿  
先を自分で出た。二人ぼつち

の寄宿生活が半年ほど続き、舎生がドンと増えたのは、冬に入るころ。通学距離の比較的遠い者が、冬だけ寄宿舎を利用するためだった。

寄宿舎には、フロがない。百円ほど離れたところに住吉湯Ⅱ梅田正治（5期）経営Ⅱがあり、月決めでフロ代を払って、通った。

「ハハーン、能中の学生さんがた、また来てるだな」

脱衣カゴを見れば、舎生がフロに入っているかどうかはすぐわかった。それもそのはずだ。カゴの底に、必ずきちんと折りたたんだハカマ。一番上に、黄線入りの学帽がちよこんとついている。

制服以外で外出する時には、必ずハカマ着用が義務づけられていた。目と鼻の先のフロへ入りに行くのにも、例外とされな

いほど校風が厳格だったのである。

こんな習慣なので、着物のたみ方にかけては名人級。

「おめ、男だでね。オレより上手だな」

畠山は、新婚ホヤホヤの時、奥さんからそんなおほめの言葉を受けたくらいだ。

寄宿舎自慢のおかずはカレーの煮つけ。たまにはいいが、毎日カレーの煮つけでは食傷する。畠山は、そのたびにうんざり。ハシをつけなくなった。

寄宿舎生活を送った一期生には畠山、清水のほか大友秀三郎（元本荘松ヶ崎中学校）ら十人。厳しさ一点張りの舎監長、今福兼蔵、卒業式の日の晩開かれた舎生の離散会で人が変わったような理解を示した。

「まず、飲めるだけ飲んでみれ」  
無事卒業の祝い気分ひたつ



さし絵は戸松恭一（新11期・能代高教諭）

ていた畠山らは、一升ビンを次々にカラにした。大分酔ってひと眠りして、また飲んだ者も。

「酒の一升ぐれだば、飲む気になればじよさね……」  
一度も酒を口にしなかつた畠

山が、妙な自信をつけたのはその離散会がきっかけだ。六十を越した最近では、二人で一升がちょうど適量だけれど……。

（敬称略）